



2023年度 小学校英語教育センターシンポジウムの報告

2023年10月14日（土）に小学校英語教育センターシンポジウムを開催しました。今年度は、学校現場においてICTの積極的な活用を通じた授業づくりがもとめられる昨今の状況を背景に、「言語活動を通して資質・能力を育成する小学校外国語教育の授業の在り方について考えるーICTの効果的な活用を通してー」をテーマとし、文部科学省視学官の直山綿子先生の基調講演と、小学校においてICT活用の先駆的な外国語教育の実践を行っているお二人の先生より、実践報告をしていただきました。また、今年度は、本センターが、公益財団法人教科書研究センターと連携し取り組んでいる学習者用デジタル教科書を用いた小学校外国語科の授業のあり方に関する研究にもとづく実践の報告を兼ねた内容としました。今回も、昨年度同様、会場の対面参加とオンライン参加のハイブリッド形式で開催したこともあり、県内外の現職教員、教育関係者及び学生など計202名（来場者51名とZoomでの視聴151名）の皆さまにご参加いただきました。以下、簡単に、シンポジウムの内容を報告させていただきます。

まず、鳴門教育大学附属小学校教諭の青山祥子先生より「言語活動の充実を目指したICTの効果的な活用ー「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に着目してー」と題する実践報告をしていただきました。具体的には、デジタル教科書、Microsoft Forms、学習支援アプリMeta Moji等のICT機器を活用することで、1)家庭学習や中間指導などにおける児童一人ひとりのニーズや状況に応じた学習が実現されること、2)自己評価や振り返りの場面で児童の学びの実態が可視化され、教師の授業改善や的確な指導・支援が行えるとともに、児童自身の学びへの自覚と自己調整が促されること、そして、3)以上の個別最適な学びの成果が、授業の単元導入や言語活動における協働的な学びに活かされ、同時に、協働的な学びの成果が個別最適な学びに還元されること、を報告されました。

次に、宮崎市立西池小学校指導教諭の岩切宏樹先生より「子ども一人ひとりが達成感を味わえる外国語の授業ーICTの活用で支える個別最適な学びー」と題する実践報告をしていただきました。岩切先生は、児童一人ひとりの指導を充実させる難しさとともに、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる言語活動を通じた指導の難しさについて言及され、その対策として、児童が聞き手意識をもつ目的・場面・状況の設定と、生徒指導の3原則（自己決定の場を与える、自己存在感を与える、共感的人間関係を育成する）を活かした活動の設定が必要な条件であることを提案されました。その条件を満たすべく取り組まれた、個別最適な学びの実現のための、ICTを活用したメモの作成（話す活動の支援）や語順を意識して書く活動、協働的な学びの実現のための「ペア学習のルール」の提示、さらに、見方・考え方を働かせる言語活動として、ICTを活用した主体的に聞く活動について報告されました。

そして、文部科学省視学官の直山綿子先生より「外国語教育における主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善ー個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に踏まえてー」と題してご講演をいただきました。直山先生は、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善、指導計画の作成と内容の取り扱い、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実などの方向性について、令和5年度実施の全国学力・学習状況調査における意識調査の結果や外国語授業の実践事例を踏まえ、また、ICTの活用と関連づけながら分かりやすく講じてくださいました。特に、ICT機器の活用については、その活用だけが先走るのではなく、言語活動やその指導の充実、効率や効果を図るためのICT機器の活用でなければならないことを強調されました。



【シンポジウムの様子】

貴重な機会となりました。今後の小学校外国語の方向性を分かりやすくご説明いただいた直山先生を始め、先駆的な実践をご報告いただいた岩切先生と青山先生、そして、本シンポジウムにご参加いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

そして最後に、直山先生をコーディネーターに、参会者の皆さまと全体討論の時間をもちました。英語を使用する必然性を創る教師の役割、言語活動を充実させるICT機器の活用、児童が自身の学びを選択することの重要性など、さまざまな視点から意見交換が行われました。以上、小学校外国語の授業におけるICTの効果的な活用について、その方向性や課題を考える

（小学校英語教育センター所長 山森 直人）





実践研究支援事業

本センターは、新しい外国語教育に取り組む小学校の実践をサポートするため、平成29年度より「実践研究支援事業」を行っています。

令和4・5年度は、徳島県小学校教育研究会外国語教育研究大会の指定校として、「コミュニケーションを図る素地及び基礎となる資質・能力を育む小学校外国語教育 ～かかわりを通して学び、自らの思いを伝え合う言語活動の追究～」をテーマに研究を進める名西郡石井町藍畑小学校の実践を、「授業づくり」や「言語活動の充実」及び「環境整備」の面から、様々な形で支援しています。

令和5年11月17日（金）、当校にて、文部科学省初等中等教育局視学官の直山木綿子先生をお招きし、第5回 徳島県小学校外国語教育研究大会が、対面とオンラインのハイブリッド型で開催されました。中学年は「紹介しよう、わたしたちの藍畑小学校」、高学年は「Let's enjoy! "My Hero" プレゼンテーション！～もっと知ってもらおう！自分のこと～」と題した授業を公開してくださいました。2年間の研究発表では、子どもたちの「話したいから学びたい」という、言語活動を通した、まさに主体的・対話的で深い学びにつながるお取組をお示しいただきました。また、分科会では、授業研究会に続き、吉野川市立高越小学校、那賀町立木頭小学校の先生方から提案発表がありました。それぞれの学校や児童の実態を踏まえて、言語活動を通した実践が展開され、単元ゴールの設定や中間指導の工夫など具体的な手立ての在り方についてお話くださいました。研究大会は、直山先生によるご講評やご講演と続き、盛況の内に終了しました。

本大会では、「言語活動を通した指導」と「指導と評価の一体化」、そしてICTの効果的な活用の視点として「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な推進についても、終始熱い意見が交わされ、小学校外国語の目指すべき方向性を、全ての参加者で共有する時間となりました。

本センターは、今後も一層地域の皆様との連携を深め、小学校外国語教育をさらに推進するお手伝いができればと考えております。



（コーディネーター 竹内 陽子・特命准教授 佐藤 美智子）



【4年生の授業】



【5年生の授業】

学習者用デジタル教科書を活用した授業づくりに関する研究



本センターでは、今年度より、公益財団法人教科書研究センターの連携研究として、「小学校外国語教育におけるデジタル教科書を活用した授業づくりに関する研究 -その実態把握と分析に基づいて-」というテーマのもとに、3年間の研究を進めております。外国語科における学習者用デジタル教科書の本格的な導入を見据え、小学校外国語教育の現場における学習者用デジタル教科書の活動に係る問題を明らかにし、効果的な外国語科の授業の在り方について探っているところです。

本センターのワーキングチームを中心に、文部科学省の初等中等教育局の直山木綿子視学官と本学学習指導力・ICT教育実践力開発コースの泰山裕准教授にご支援いただくとともに、授業試行においては、鳴門教育大学附属小学校様、名東郡佐那河内小学校様、石井町藍畑小学校様にご協力いただいております。

協力校からは、学習者用デジタル教科書を活用して、児童が個別に音声聞いて語句や表現を確認・練習したり、動画を見直して内容の理解を深めたりする学習方法が身に付いてきたという声が届いています。また、学習支援ソフトと併用することで、目的・場面・状況に応じて表現を付け加えたり話す順番を換えたりするといった工夫を凝らし、相手によりよく伝えようという姿が見られるようになってきたという報告もされています。

初年度の研究の進め方として、学習指導要領の理念を踏まえ、先行調査から情報収集や活用する意義に関する検討、徳島県内のICT環境や学習者用デジタル教科書の活用状況に関する指導者や児童の意識調査を行い、学習者用デジタル教科書を活用した小学校外国語の授業イメージを明確化しようと試みてきました。前述の研究協力校において、学習者用デジタル教科書の活用の有用性ととも解決すべき課題が少しずつ見えてきたところです。

10月14日（土）には、「言語活動を通して資質・能力を育成する小学校外国語教育の授業の在り方について考える -ICTの効果的な活用を通して-」をテーマとする小学校英語教育センター主催のシンポジウムを開催し、学習者用デジタル教科書の試行的な活用についての実践報告を聞き、参加者の方々と情報共有をする時間をもったところです。

今年度明らかになった実態を踏まえて、研究協力校とともに学習者用デジタル教科書のより有効な活用について研究を進めて参りたいと考えております。



（コーディネーター 竹内 陽子・特命准教授 佐藤 美智子）

